



Luis Barragán
— Understanding Space

ルイス・バラガン
空間の読解

大河内 学 + 廣澤秀眞
+ 明治大学大河内研究室 編著

ルイス・バラガン
空間の読解

Luis Barragán — Understanding Space

大河内 学 + 廣澤秀眞
+ 明治大学大河内研究室 編著

はじめに 大河内 学

ルイス・バラガン・モルフィン (Luis Barrágan Morfin, 1902-1988) は、メキシコを代表する建築家であり、メキシコのモダニズムの受容と発展に大きく貢献し、近代建築の巨匠の一人として評価されている。今日でこそバラガンの作品は、メキシコ国内のみならず世界に広く知られるようになったものの、その建築思想や設計手法についての理解は不十分である。また、建築家としてだけでなく、都市開発の事業家という別の顔を持っていたことは意外と知られていない。本書は、建築の初学者から専門家に至るまで、バラガンの建築をより深く理解したいと考える人のための解説書である。バラガンという一人の建築家を糸口にして、建築のデザイン論、空間論にも関心を広げていただければ幸いである。

バラガンの色鮮やかな壁、噴水、水盤、そして光を巧みに使いこなし建築と庭園は、崇高、安息、喜び、孤独、哀愁、沈黙といった複雑な感情を次々と誘起し、体験するたびに新鮮な驚きと解釈を与えてくれる。また、独特の色彩と抽象的な建築言語を駆使し、自然と建築の調和、モダニズムと伝統の融合を目指した数々の傑作は、近代建築が到達した美の極北として今も色褪せることはない。バラガンの盟友であり、芸術家マティアス・ゲーリッツの「感情的建築／エモーショナル・アーキテクチュア」なる言葉は、バラガンの建築を批評する上で、まさしく正鵠を得た表現である。バラガンの建築を眼にしたものは、誰もがその美しさに息をのみ、感情を揺さぶられる。したがって、その魅力を知るためには、まず実際に空間の現象を体験し、五感で感じ取ることが何より一番の近道であることはいまでもない。そして、さらに深い理解を得ようと思えば、バラガンの思想と哲学、深層に横たわる空間の構成原理を丁寧に読み解くことが必要であろう。そのため本書では、バラガンの建築の特徴を6つの概念(回遊性、スケールと素材、内向性、庭、重層性、色彩と光)に分類し、バラガンの建築を様々な切り口により読解することとした。ひとつの概念(キーワード)に対し、それを説明する上で最もふさわしい作品を代表して例示し分析を試みたが、必ずしも概念と作品が一对一で対応するものではない。むしろ、6つの概念は本書で扱う作品すべてに通底するものであると考えていただきたい。したがって、各項の末尾には、その概念が特徴として現れるその他の作品についても例示してある。6つの切り口に沿って読み進めることで、一度解体されたバラガンの建築が一層明確な像を持つものとしてそれぞれの読者の中で再統合されることを期待したい。また、巻末には実測をもとにして描き起こした図面を掲載し、資料としても価値あるものとなるように努めた。また現地で見学される際の一助として建築 MAP を掲載したので是非利用していただきたい。

Contents

はじめに 大河内学	3
1 回遊性／ルイス・バラガン邸	10
2 スケールと素材／プリエト・ロペス邸	34
3 内向性／トゥラルパンの礼拝堂	54
4 庭／ガルベス邸	66
5 重層性／サン・クリストバルの厩舎	90
6 色彩と光／ヒラルディ邸	106
Essay	
ルイス・バラガン：偉大な建築家 フアン・パロマール	6
都市開発とランドスケープ 廣澤秀眞	84
絵画的空間の集合体としての建築 大河内学	120

Interview

メキシコ建築史のマイルストーン カタリーナ・コルクエラ（聞き手・翻訳＝廣澤秀眞）	30
---	----

ルイス・バラガン年譜	8
------------	---

Appendix

バラガン建築 MAP	127
------------	-----

図面集	130
-----	-----

あとがき 大河内学＋廣澤秀眞	142
----------------	-----

参考文献／略歴	143
写真クレジット	144

執筆担当 大河内学 3, 34-65, 90-105, 120-126, 142
廣澤秀眞 10-33, 66-89, 106-119, 142

ブックデザイン みなみゆみこ

1 回遊性

ルイス・バラガン邸

Casa Estudio Luis Barragán
Tacubaya, Mexico D.F. 1948

チャプルテペック公園に隣接するタクバヤ地区に建つ自邸兼アトリエである。故郷グアダハラから首都に活躍の場を移したバラガンは、1940年頃に土地を購入し、数年かけて旧自邸（現オルテガ邸）と庭園をつくる。この後、敷地の一角を除きすべての土地をオルテガに売却し、1948年、当初は施主のために設計したこの住宅に移り住んだ。その後、バラガンは1988年に逝去するまで生涯この場所に住み続けることとなる。この時期を境に、バラガンはモダニズムにメキシコの伝統建築の様式を組み込んだ設計手法を確立し、後にこの作品は近代建築の傑作のひとつとして賞賛されることとなった。2004年にはユネスコ世界遺産に登録されている。

バラガンにとってこの作品は、都市化の圧力

に屈せず、メキシコの伝統的な小さい規模の界限を、慎み深い住宅でつくるという意志を高らかに宣言するものであった。モルタルで仕上げられた高さ約9,000mmの外壁が敷地境界の際にそびえ立つ。この簡素な壁には大きな格子窓と小さな窓が2つ、スチール製の玄関扉しかなく、外壁の奥には白く高い階段室の塔が見える。リビングには4,400mm角の嵌め殺し窓があり、その窓枠は十字の形をしている。敬虔なクリスチャンであるバラガンは、他の部屋にも十字をモチーフにした建具を設計している。1階のダイニングルームと朝食室、2階のベッドルームとゲストルームは庭に向かって窓が開かれている。「庭はそれ自身の中に宇宙全体を持つ」というフェルディナン・バックの言葉を体現した庭は静かな生命力に満ちている。



リビングルームから庭を望む。十字架をモチーフにした大きな窓から光が射し込む。右の壁の絵画はジョセフ・アルバースの作品。バラガンはこの作品を眺めては光と色彩の関係に思索を巡らせていた

階段室は立体的な回遊動線の要である。各居室に通じる扉が設けられている。上部の窓から燦々と光が降り注ぐ



回遊性とスケールの抑揚

行き止まりのない回遊性こそが、この住宅を奥深き迷宮たらしめている所以であろう。個性豊かな複数の部屋と庭を次々と渡り歩く体験は、そこに終生住んだバラガンの日常を新鮮なものとしたに違いない。ジグザグと進行方向を変える廊下を歩くと、思わず方向を見失いそうになる。垂れ壁、袖壁、身長よりも少し高い壁が空間を適度に遮蔽するため、全体を見通すことができず、段階的に次の空間の存在を知覚する仕組みになっている。こ

うした複雑な構成でありながら、主動線とサービス動線が矛盾することなく解決されているといった計画上の配慮も見逃せない。

バラガン邸は大小の様々なサイズを持つ部屋を内包している。小さなスチール製の玄関扉を開けると閉鎖的で小さなエントランスに入る。扉上部の着色ガラス窓から微かな光が漏れる薄暗い空間だ。その先の扉を開けると、天井の高い階段室が現れ、その上部からは光が燦々と降り注ぐ。このように大きな空間と

小さな空間を交互に連結させることで、回遊動線の中にスケールの抑揚が生まれている。リビングルームとライブラリーは広々とした一室空間であるが、屏風と袖壁（高さ1,800mm）で緩やかに分節されている。ライブラリーの壁には片持ちの階段があり、2階のゲストルームへとつながる。ゲストルームは天井高が低く抑えられ、開口はあえて小さく絞られている。住宅の至る所にこのような意図的なスケールの操作が認められる。



⑫ 庭からリビングルームを見る



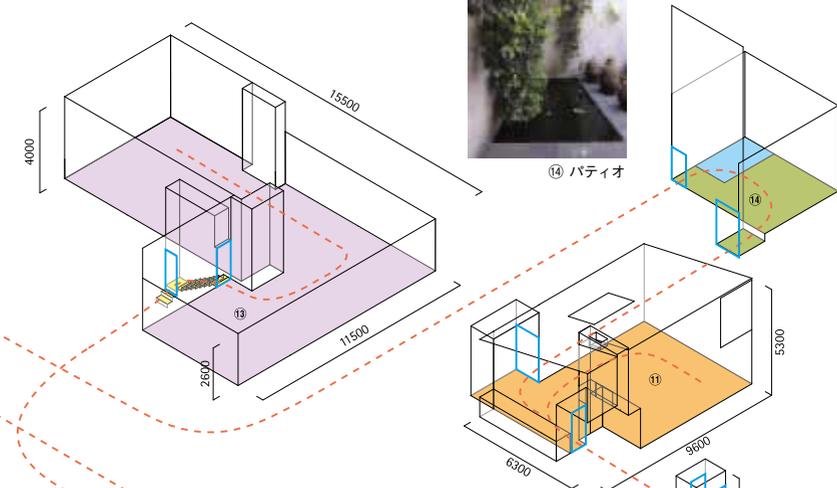
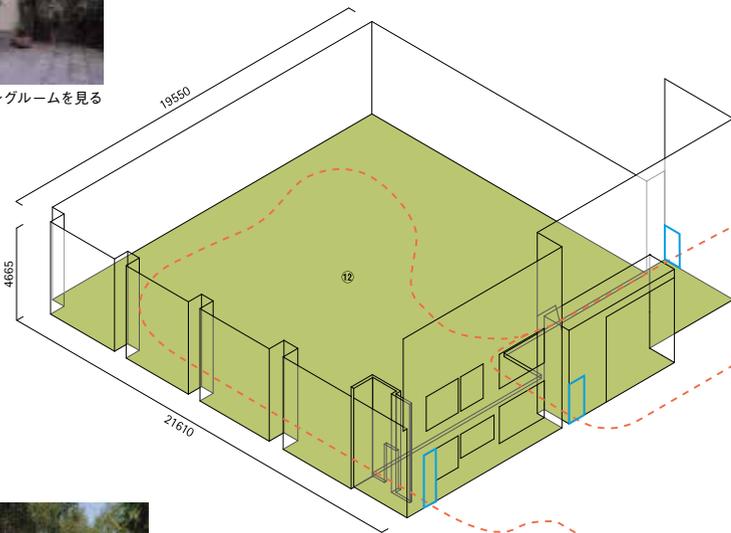
⑭ パティオ



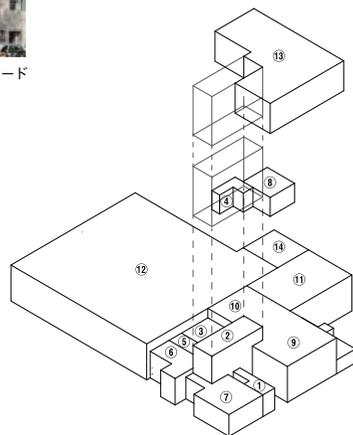
⑭ パティオ



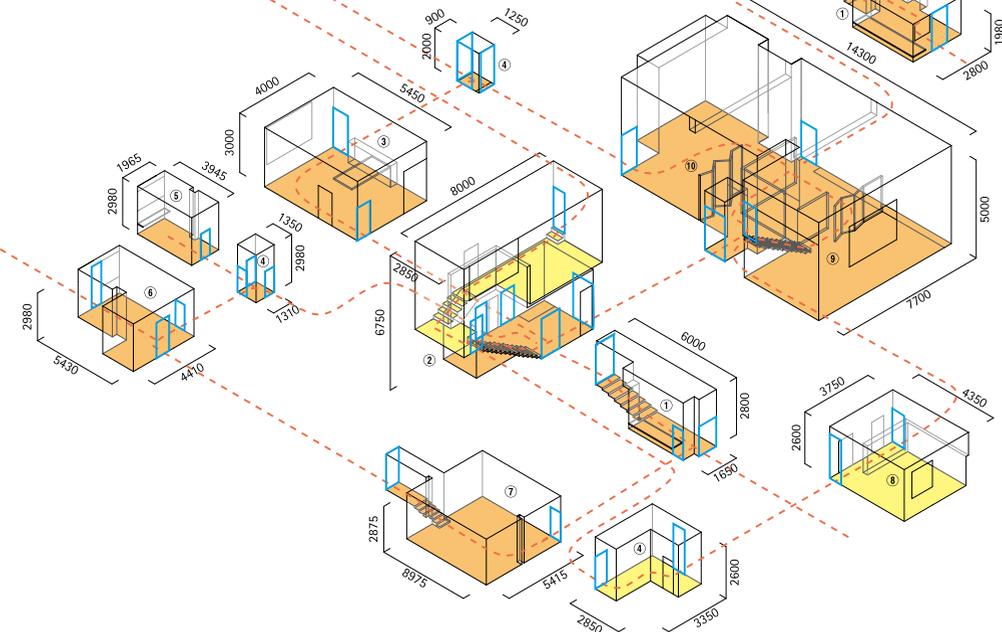
⑪ アトリエ



道路側ファサード



- ① エントランス
- ② 階段室
- ③ ダイニングルーム
- ④ 廊下
- ⑤ 朝食室
- ⑥ キッチン
- ⑦ ガレージ
- ⑧ 書斎
- ⑨ ライブラリー
- ⑩ リビングルーム
- ⑪ アトリエ
- ⑫ 庭
- ⑬ 屋上テラス
- ⑭ パティオ



様々なサイズの部屋と回遊的な経路

6 色彩と光

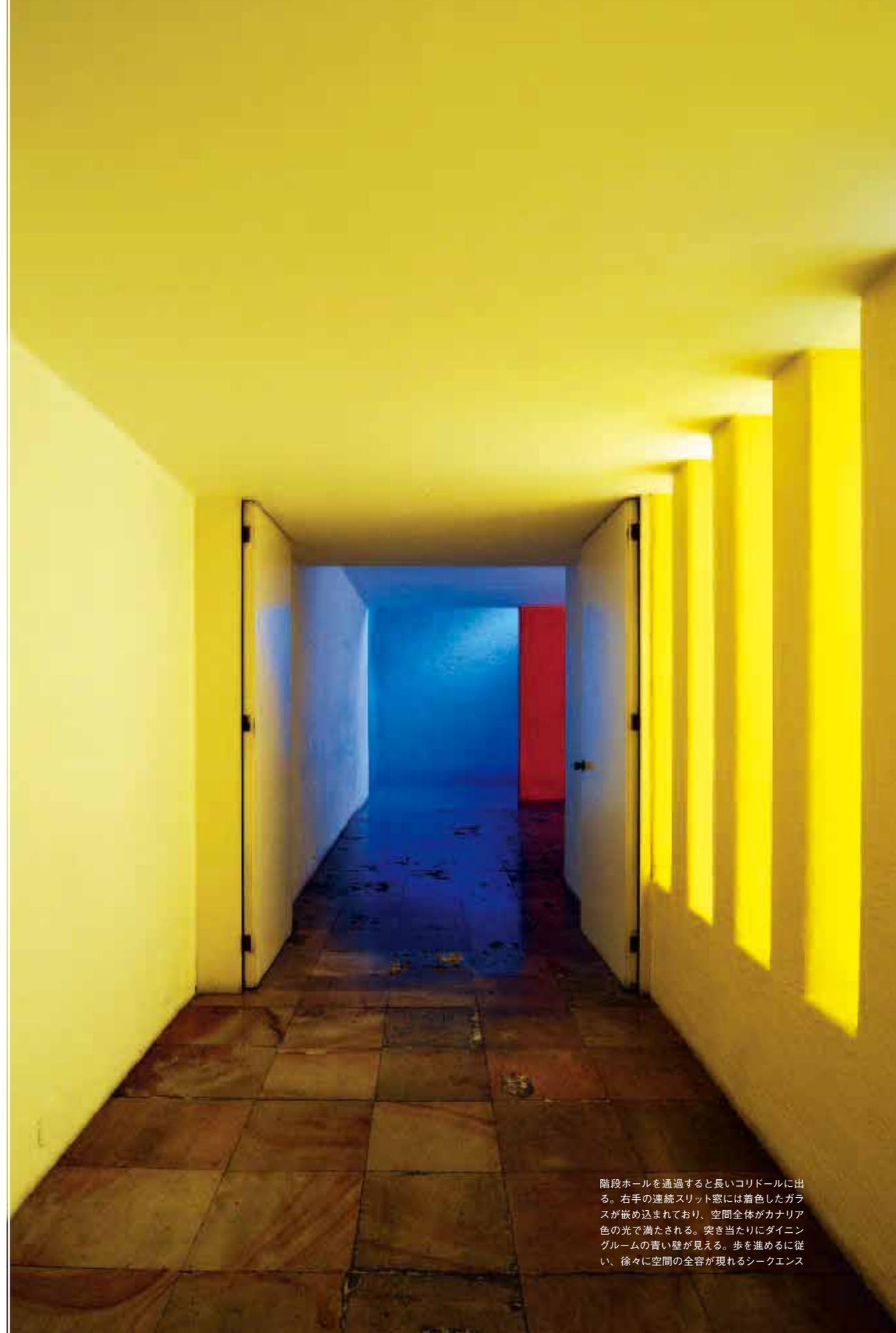
ヒラルディ邸

Casa Gilardi

San Miguel Chapultepec, Mexico D.F. 1978

サン・クリストバルの厩舎以降、隠遁生活を送っていたバラガンが、約10年の沈黙を破り、オーナーであるフランシスコ・ヒラルディの依頼に応じて設計した晩年の作品。幾何学的で簡潔なインターナショナルスタイルのデザインを踏襲しつつも、メキシコの土着的な色彩を大胆に取り入れた都市型住宅である。間口が狭く細長い敷地形状（10m × 35m）で、バラガンがそれまで設計してきた大きな邸宅に比べると制約の多い土地であった。そこにベッドルーム、リビングルーム、階段ホールなどを配置した3層のボリュームと、ダイニングルームとプールを配置した平屋のボリュームをコリドールで連結した構成を持つ建物を敷地いっぱいにて建てた。カナリア色の光に満ちた細長いコリドールから、ダイニン

グルームに至る長いシークエンスは、その先に待ち構える場面への期待をいやが上にも高めるだろう。コリドールの奥にあるダイニングルームは、紛れもなくバラガンが生涯をかけて到達した美の極致である。手前のフロアと奥のプールに2分割され、背景となる壁は鮮やかな青、白で塗装されている。プールの水盤には鮮烈な赤に塗られた象徴的な壁柱が屹立し、重力を失ったかのように水に浮かんで見える。ハイサイドライトからの光は青い壁にあたり、水中まで射し込む。抽象的で色彩豊かな空間を舞台に、刻々と変化する光により季節と時間の様相が表現された至高の空間である。ダイニングルームの南側には、壁一面に大きな開口が設けられ、ハカランダの樹が生い茂るパティオに向けて開かれている。



階段ホールを通過すると長いコリドールに出る。右手の連続スリット窓には着色したガラスが嵌め込まれており、空間全体がカナリア色の光で満たされる。突き当たりにダイニングルームの青い壁が見える。歩を進めるに従い、徐々に空間の全容が現れるシークエンス

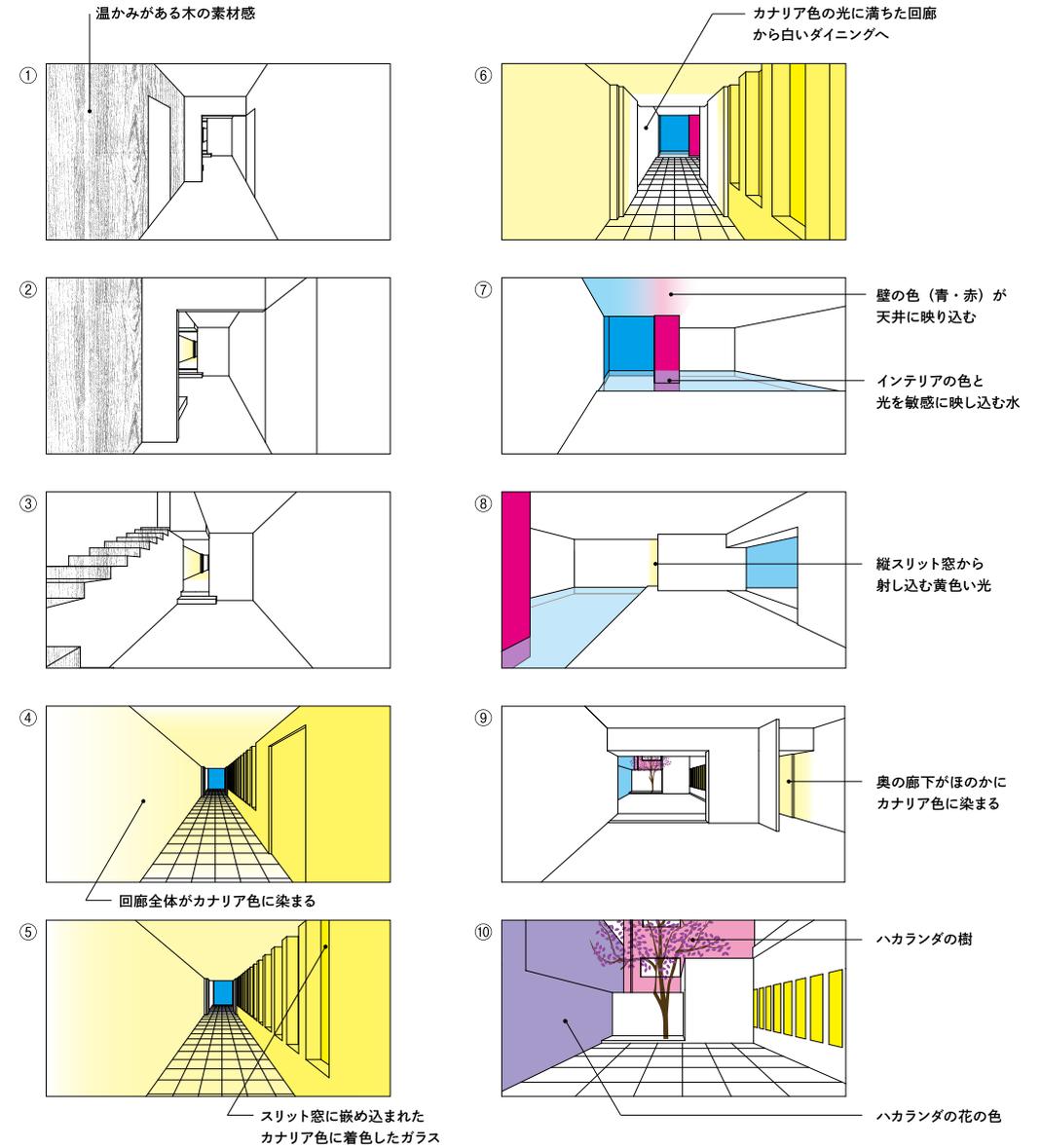
シークエンスと色彩

1940年代後半から、バラガンはカラフルな色彩を壁や天井に塗装する方法を模索し始め、やがて彼のアイデンティティとして定着していくが、その実践を支えたのは、友人でアーティストのチューチョ・レイエスである。彼は、建設中の現場を訪れては、色彩に関する助言を与えていたという。チューチョはメキシコの古美術に造詣が深く、色彩のエキスパートであったため、バラガンの彼に対する信頼はとてつもないものであった。ヒラルディ邸は

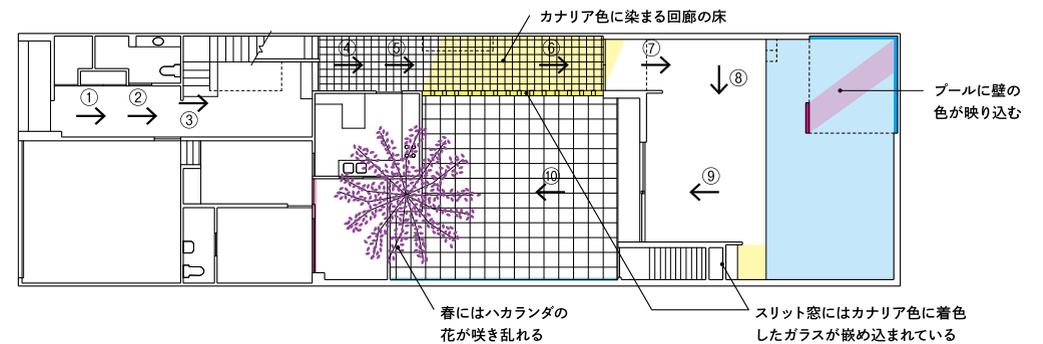
チューチョの没後に設計したため、バラガンが彼の教えを継承し、独自に色彩の計画を行ったものである。外部はピンク、薄紫を配した大胆な色づかい。対照的に内部は白い壁を基調とし、抑制的である。そのためコリドールやダイニングルームの鮮やかな色の体験は相対的に強められることとなる。バラガンが緻密にシークエンスと配色の関係を検討した痕跡が認められる。



上部から光が降り注ぐ階段ホール。直進するとコリドールに続く奥にプールの青い壁が見える。左手は2階に上る階段。バラガンは手摺のない階段を好んで設計した。奥行きのあるシークエンスに異なる色彩によって性格づけられた空間が存在している



エントランスからパティオまでのシークエンスと色彩 (①→⑩)



パースペクティブ (①→⑩) と色彩